

たものゝ、實は纂修された三史に何が書いてあるのか解しなかつたものである。(これを受けた天子順帝もまた同様に解し得なかつたと思はるゝことは前記の通りである)。かゝる事例について考へると、元一代の間天子も宰相も多くは漢文に通じなかつたと見る趙翼の説は、益々確實さを増して来る。そうして上流蒙古族の間にかゝる風潮が漲つて居つたとすれば、彼等一般の間にもこれが及ぶべきはいふまでもないことで、葉子奇の草木子雜俎篇には、ある蒙古人の長官が漢字で日附に七の字を書かねばならなかつた時に、第二畫の鈎を右に曲げるのを間違へて左に曲げ、十と書いたといふ笑話も見えて居る。其の間に漢文に通じ、學術文藝に名を得た人々も、勿論今日に知られて居るにしても、それは數の比例からすれば、極めて僅かに過ぎないものである。延祐以來行はれた科擧に及第したもの、或はまた國子擧に入つて成規の試験に合格したもののおつたことなども、いふまでもなく明白な事實ではあるが、此等の試験についても、科擧は蒙古人と色目人とを一種、漢人・南人を一種とする二種類に分れ、前者と後者とに於ては、試験科目にも程度にも相違があり、國子擧の試貢法に於ても、蒙古人に對しては

試貢法……試蒙古生之法。宜從寬。色目生稍加密。漢人生則全科場之制。元史卷八十 一、選舉志

と規定してあり、従がつて同じく國子擧の出身者、もしくは科擧の及第者であつても、蒙古人と漢人・南人とが同様の學才を有して居つたものとは認められない。

上に述べたやうな有様から考へれば、この時代には、他の北人の建てた諸朝に見るやうに、上下共に蒙古人が漢學を尊重し、これを學ぼうとしたとは到底考へるを得ない。さて此の如く漢文も解し得ず、解しようとも努めなかつた元の天子や宰相が、實際上の統治に當つて、その詔勅や官府の文移の如きを如何に處置したであらうか。